施設栽培の灰色かび病に注意しましょう
（平成27年4月30日）

　病害虫防除グループの4月の巡回調査では、トマト、なす、ぶどうの灰色かび病が平年と比べ、多く発生しています。今後１か月間は、平年に比べ晴れの日が多いと予報（※）されていますが、曇天や降雨が続いた場合は、発生が増加する恐れがあります。
ほ場をよく見回り、発生に気をつけ、発病が認められた園では早めに防除を行いましょう。
　※大阪管区気象台による近畿地方1か月予報（平成27年4月23日発表）

＜発生状況＞

表1　灰色かび病の発生状況(4月巡回調査結果)

施設ぶどう(調査日：4月17日)

調査地点	発病果房率
柏原市安堂	0.0%
柏原市青谷	6.0%
羽曳野市駒ヶ谷	5.0%
平均値	3.7%(0.1%)

施設なす(調査日4月22、24日)

調査地点	発病株率
富田林市西板持町Ⅰ	24.0%
富田林市西板持町Ⅱ	4.0%
貝塚市海塚	4.0%

泉佐野市日根野	0.0%
平均値	8.0%(0.9%)

施設トマト(調査日：4月23日、9日)

調査地点	発病株率	
	4月23日	4月9日
泉佐野市上之郷	4.0%	4.0%
泉佐野市日根野	0.0%	56.0%
平均値	2.0%(2.6%)	30.0%(4.6%)

※(　)内の数値は過去 10 年の平均値

▲ぶどうの被害

▲なすの被害

▲トマトの被害

＜生態と防除対策＞

(1)灰色かび病の病原菌(Botrytis cinerea Persoon)は糸状菌(カビ)の一種でトマト、なす、きゅうり、レタス、ぶどうなど多くの野菜類、花き類、果樹類に感染し、発病する。20℃くらいで多湿時に発生しやすい。

(2)なすやトマトでは、果実や花弁、ガク、葉などに多く発生する他、茎に発

生することもある。ぶどうでは開花前後の花穂と成熟期の果実に主に発生する。
（3）病原菌は生きた植物を侵すだけでなく、咲き終わった花がらや、葉の傷んだ部分等でよく繁殖し、次の伝染源となる。
（4）果実に付着した花がらは、早めに取り除く。
（5）ハウス栽培では雨水の流入を防ぎ、過湿にならないよう、換気に努める。朝夕の急激な冷え込みは発生を助長する。
（6）薬剤散布は日中を避け、散布後は十分に薬液が乾く時間を考慮して換気を行い、ハウス内の湿度が上がらないようにする。
（7）同一薬剤の連用は耐性菌の発現を助長する恐れがあるため、異なる成分のローテーション散布を行う。
（8）薬剤散布に当たっては、収穫前日数や使用回数を十分確認する。
（9）防除薬剤については、Web 版大阪府農作物病害虫防除指針（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）を参照する。

◎防除薬剤については、
●Web 版大阪府農作物病害虫防除指針
（http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）
●農林水産消費安全技術センター　農薬登録情報提供システム
（http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm）
で確認してください。